



質疑応答では、酒類輸出の展望や茶の販路拡大などについて、多くの質問が出ました

鹿児島支店 「稼ぐ力」のヒントを探る 食と農を結ぶ交流フォーラム

鹿児島県農業法人協会との共催により、13回目を迎える本会に農業者など109人が集いました。

講演会では、日本酒「鍋島」ブランドを手掛ける富久千代酒造有限会社（佐賀県鹿島市）代表取締役の飯盛直喜氏が登壇し、地域資源を生かし、地元で愛される商品作りの大切さを話しました。また、有機茶を生産する有限会社坂之上製茶（鹿児島市）代表取締役の坂之上勝利氏は、カフェ事業などへの挑戦について事例発表しました。懇親会では、県内外からの参加者同士の異業種交流が盛んにおこなわれました。（1月16日）



国内外の実例を紹介しながら関係者間の連携の重要性などを語る太田氏

松江支店 漁業管理の在り方を考える 水産関係者向け講演会開催

一般社団法人境港水産振興協会、境港商工会議所水産業部会などの関係機関と講演会を共催。70人が参加しました。

株式会社みなと山口合同新聞社の太田毅人氏が「漁業管理に『目的共有』をく変わる環境、描くべきビジョン」をテーマに講演しました。太田氏は、漁業環境の変化に応じた資源管理の方策を考える大切さを説明。

参加者からは「これからの資源管理手法や、関係者との連携の取り方を考えるにあたって大変参考になった」などの感想が聞かれました。（2月21日）



異常気象の仕組みや気象情報の重要性を説く講演に参加者は熱心に聞き入っていました

山形支店 農業と気象をテーマに 「農と食の交流会」を開催

県内の農林漁業者、食品事業者などの情報交換を目的に交流会を開催。60人が参加しました。

講演会ではテレビ番組などで活躍する気象予報士の小林正寿氏が登壇し、猛暑や線状降水帯、大雪など異常気象のメカニズムについて、事例を織り交ぜつつ解説。県内で発生した令和6年7月25日からの大雨災害にも触れ、気象情報を活用し、命と農作物を守るよう強調。

参加者から「最近では異常気象や災害が多発しているので大変参考になった。今後の営農における対策へ適切に生かしたい」などの感想が寄せられました。（2月26日）



さまざまな種類の狭山茶の試飲もあり、会話が弾みました

さいたま支店 民間金融機関を招き 茶業勉強会を開催

飯能信用金庫と埼玉県信用農業協同組合連合会を招き、「狭山茶」の勉強会を埼玉県茶業研究所で開催。31人が参加しました。

同研究所では茶業の現状や狭山茶の特徴について講義を受けたほか、茶園や製茶工場などを見学。日本公庫からも全国の茶農家の決算動向や審査のポイントなどを紹介しました。県西部を基盤とする飯能信用金庫からは本部と7支店から22人が参加し、勉強会後には「茶業は地域の重要な産業だが、知らないことも多い。大変勉強になった」と関心の高い様子が見られました。（2月26日）

次号予告 秋1号(10月発行)

「海洋環境の変化への対応(仮)」

海面漁業の漁獲高はこの20年間に4割減少した。原因の一つは海水温の上昇など海洋環境の変化だ。漁獲対象魚種や漁法の転換、兼業化など漁業者の経営リスク分散の取り組みを紹介し、今後の持続可能な漁業に向けた方策を考える。

ご意見募集

今号はいかがでしたでしょうか。感想やご意見をお寄せください。FAX・eメールなどで受け付けています。掲載させていただいた方には薄謝を進呈いたします。

FAX: 03-3270-2350
eメール: anjoho@jfc.go.jp

本誌に登場する生産者や食品製造業の皆さまの信念、情熱にも感動しました。畜産業への参入、エコフィード活用による生産成績の向上や需要創造、エコガーデニング構想など、どれも並大抵の覚悟

それと同時に食品残渣をエコフィードとして活用することは思っていた以上に難しく、しっかりと設計された仕組みであることに驚きました。

夏1号の特集「食品再生で育む循環社会」を拝読しました。私が幼いころ、家畜に残飯を与えているという話を聞いたことがありましたが、現在は食品残渣をエコフィードとして農産物の生産に利用していることや、農業も循環型に変わっていることを知りました。

悟ではできない取り組みです。普段何気なく食べている農産物や食品がそのような信念、情熱で作られていたとは——。私の幼い息子と娘にも農産物のありがたさを伝える必要があると感じました。

お米価格の高騰が日本中を騒がせ、わが家の食費もかさみますが、農産物や食品のありがたさを見直すよい機会と考えています。

日本公庫には、外部環境の悪化においても不断の努力を欠かさず、私たちに安心安全な農産物や食品を提供してくださる生産者や食品製造業の皆さまへの引き続きの支援をお願いします。また、生産者の信念や情熱、農産物や食品のありがたさも本誌で積極的に発信してもらいたいです。

(香川県高松市 古賀麻美)

編集後記

8月よりAFCフォーラム編集部に加わりました。これからどうぞよろしく願います。「耕畜連携」のさまざまな取り組みを拝見し、畜産経営にとって安定した飼料の確保が、いかに困難かつ重要か、ということを改めて実感しました。厳しい経営環境が続いていますが、今号が皆さまの「持続可能な畜産業」の一助になれば幸いです。

(清野)

「特集②」と「新・農業人」の二つのコーナーの計3人の経営者に取材させていただきました。皆さまそれぞれ手法が異なれど、地域の方々と関係性を構築されていたことが印象的でした。昨今から続く、資材費の高止まりなど苦しい状況だからこそ、一人で抱え込まず、皆で協力する——これが大事であることを痛感しました。

(宮崎)

「フォーラムエッセイ」のジローラモ氏はイタリア南部ナポリ出身です。ナポリはピッツァの本場ですが、米料理もあるとか。その名も「リーゾ・アル・フォルノ」。米とトマトソースを混ぜサラミやチーズをのせてオーブンへ。トマトの酸味と肉の旨味が合わり絶品という話を伺いました。お腹が鳴り続ける取材でした。

(岩本)

今号では、牛や豚の写真を掲載しましたが、泣く泣く不採用となった写真がありました。なでうとするオーナーの手に家畜たちが頭をすり寄せ、目と目が合う睦まじい写真。自分たちにおいしいエサをくれる人、大事にしてくれる人がわかっていくんですね。「一頭一頭に向き合う」「丁寧に育てる」瞬間を垣間見ました。

(水谷)

AFCフォーラム 2025.9 夏2号

編集

小柳 典義 清野 健 宮崎 善幸
澤田 真理 岩本 悠里 黒川 知洋
村上 裕紀 水谷 徳子

編集協力

金子 弘道

発行

株式会社日本政策金融公庫
農林水産事業本部

〒100-0004
東京都千代田区大手町1-9-4
大手町フィナンシャルシティ ノースタワー
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail anjoho@jfc.go.jp

印刷

株式会社DI Palette 東京本部

* 本誌に掲載している記事、写真、図表、データなどをご利用になりたい場合は、事前に当社までご連絡ください。